沖縄・八重山文化研究会会報

第209号
発行　沖縄・八重山文化研究会
事務局　沖縄県立芸術大学付属研究所　波照間永吉研究室
那覇市首里金城町三-一-八
TEL〇九八-八八一-五〇四三

第二〇九回沖縄・八重山文化研究会（会長三木健）は、二〇一〇年二月二十一日、県立芸大付属研究所内で開かれ、齋木喜美子氏（中京女子大学准教授）が「伊波南哲の児童文学」と題して発表した。齋木さんは具志川市生まれ。琉球大学、神戸大学大学院を経て、現職。近代以降現代までの沖縄の児童文化・児童文学史研究を専門とし、『近代沖縄における児童文化・児童文学の研究』（風間書房、二〇〇四年）で第二六回沖縄文化協会賞を受賞している。

伊波南哲の児童文学

齋木　喜美子

今回伊波南哲（いばなんてつ）という作家に注目し、とりわけ戦中の作品を取り上げてその表現や主題、社会に与えた影響や功罪について、沖縄の文化的状況と重ねながらいくつかの特徴的な作品を具体的に見ていき、考察したことを報告した。

（事例1）「懐しい南海の孤島よ―琉球の民謡と少女」
（「少女画報」一九三九年三月）

文中で南哲は琉球民謡を謡う琉球の少女たちの様子を情緒的に綴っている。そして「…琉球の少女たちは、それなりに立派な詩人であり、歌人であるのに、彼女たちはそれを歌はふとはしない。」「…文化の雑音が、遠き南海の孤島―龍宮にまで侵入していつたせいであらうか。～中略～しかし彼女たちはいまにきつと歌ひはじめるであらう。彼女たちの使ひ馴らした方言が普通語に替はり、新らしい言葉に依る表現のしかたをしつかりと身につけたときこそ彼女たちが、嘗ての祖先たちにみる優秀な才能を打ち負かして、素晴らしい詩人となり、音楽家となるの日が必ずやつてくるに違ひない。私はそれを信じています。」と結ばれている。

南哲が幼少期を過ごした八重山ではすでに標準語教育が励行されていた。しかし詩人としての南哲自身は、体内にしみ込んだ郷里の言葉の機微、民謡やユンタ、ジラバ

と呼ばれる八重山の労働歌のもつリズム、内から迸り出るような即興的な言葉とは違う言葉で表現しなければならないことにギャップを感じていたのではなかったろうか。その違和感がこうした表現につながっている。

（事例２）『南の島の少年たち』
（田中宋栄堂、一九四二年十月）

本書に登場する少年少女はいずれも純朴でけなげで勇敢で、何事にも一生懸命に取り組む子どもたちである。

「毒蛇を捕へる少年」では毬投げをして遊ぶ子どもらしい姿と、いざとなれば自分の指を切り落とす大人も顔負けの度胸と大胆さを兼ね備えた姿が混在して描かれ、そこには純朴でかつ勇敢であってほしいという南哲の理想の子ども像をみることができる。また「子守唄」では、八重山の生活の中から生まれた歌が島の人々に美しく豊かな感情を注ぎ込むので、それを受けた子どもたちは純情でまっすぐ育つという価値観が示され、「鷹の落したお土産」では、イバツの正体が、母の心づくしのであったことを知ってしまう少年の感傷が描かれている。南哲がこれほど純粋な少年像に執着するのは、それだけ子ども時代を尊く美しいものとして受け止めているからでもあろう。

（事例３）「うみの　こ　いとまん」
（「良い子の友」一九四三年七月）

戦意高揚を煽った作品ではないが、糸満漁師の子どもたちが南洋の海にこぎ出していく大胆さと気楽さが描かれ、子どもたちの暮らしと南洋が密接につながっていることを強調している。

南哲が中央で注目されはじめた時期は、国策上南洋に対する関心が高まりつつあり、南哲の創作にとっては好機であった。南哲自身にも、時局柄自分に期待されている執筆内容の方向性については自覚があったと考えてよい。それは南哲の作家としての地位を築く一方で、引き返すことのできない深みにはまっていくことにもなったのであった。

（事例４）「敵艦見ゆ」
（「少國民の友」、一九九四年五月）

この作品はもともと稲垣国三郎（一八八六～一九六七年）による日露戦争時の日本海海戦にまつわる物語で、美談として一世を風靡した。遅れた沖縄を本土並みに引き上げたいという沖縄側の願いと、沖縄方面の国防力を強化したいという本土側の思惑が重なった時期にこの物語が世に出、「久松五勇士」の名で広まったのである。

南哲は情熱的な文章で、「沖縄人」がいかに優れた「日本人」であるかを強調している。南哲の真意が沖縄の地位を高め、沖縄の子どもたちに日本人としての誇りを持たせたいというところにあったとしても、それが沖縄戦で戦闘に巻き込まれていった少国民たちに、死への一歩を踏み出させる力になりはしなかったか、あるいは沖縄人は優れて個性的な日本人であり、侵略の対象であったアジア諸国の人々とは違うのだという差別意識をもたせることにつながらなかったのか。その点は今後厳しくとらえ直されねばならない。

南哲の児童文学作品を検討した結果、以下の特徴が指摘できる。

1．郷里を題材にした文学の発信に伴う言葉の壁
2．子どもに対する感傷と啓蒙的視点
3．「日本人」、「沖縄人」としての自意識

なぜ南哲が「沖縄」的なものにこだわり、沖縄を表現しようとし続けたか。そこには単なる郷愁やロマンチシズムとは違う、本土との関係性から生まれる強い自意識を見出すことができる。それは沖縄人としての矜持、アイデンティティと置き換えてもよいと思う。山之口貘の吃音的表現に比べると、一見南哲は直截的で雄弁であるように見える。しかしその中に南哲の「焦燥」感が垣間見えるのである。

文化短信

森の保全で国際シンポ　デイゴ被害で意見交換

御嶽など信仰の場にみられる植物や森の環境保全などをテーマにした国際シンポジウム「消えゆく沖縄のリュウキュウマツとデイゴを救え」がこのほど石垣市内で開かれ、デイゴヒメコバチによるデイゴの被害などをテーマに研究者やＮＰＯの関係者ら九人が講演やパネル討論を行った。沖縄や日本本土、韓国、台湾で信仰の場と植物の関係を調べているアジア鎮守の杜（もり）の再生実行委員会が開いたもので、約一〇〇人が参加した。八重山郡内では、デイゴの回復を目指す取り組みが広がっており、ＮＰＯ花と緑の石垣島（前津栄信代表）が「石垣島デイゴ再生プロジェクト」、竹富島関係者が「竹富島のデイゴの木を救え」プロジェクトをそれぞれ推進中である。

この日のシンポで、「竹富島のデイゴの木を救え」プロジェクト実行委員会の亀井保信事務局長が活動資金の確保が「ネックになっている」と述べ、近くホームページを開設して募金を募る計画を紹介。早急な取り組みを呼び掛けるなどした。韓国の箕青山植物園研究所の姜基縞（カン・ギホ）所長は、韓国のマツクイムシ対策について特別法を制定して予算と人材を確保したことなどを説明。名護市の県森林資源研究センターの喜友名朝次主任研究員はデイゴヒメコバチ対策のポイントとして、葉が広がる前の時期にデイゴヒメコバチの産卵をいかに阻止するかという点を挙げた。また波照間教授は琉球文学研究の立場から「おもろそうし」などの文献を通じて御嶽の植物と信仰の関係について読み解いたうえで、「御嶽をどのように守るのか。それは島の景観を守ることにつながっている」と提起した。シンポの翌日には竹富島世持御嶽のデイゴなどを視察。今年駆除を始めればまにあうとした。

高校卒業の三人台北教育大留学へ

去年四月にスタートした石垣市の中国語短期集中コースを受講した高校生三人が、台北教育大学に留学するため石垣空港から台湾へ向かった。「不安だが楽しみもいっぱい」と話す三人は同級生や恩師、一緒に中国語を学んできた仲間の見送りを受けて台湾へ出発。当面は中国語を学ぶために設けられている同大の語学センターで語学力を高め、必要な試験にパスすれば、九月から同大学に通うことになっている。

大濱信光全詩集を出版

没後二六年、八重山の文化運動に大きく貢献した詩人の故・大濱信光さんの未発表作品などを収録した『大濱信光全詩集』がこのほど遺族の手によって刊行された。

大濱氏は一九〇二年生まれ。八重山郡内の小学校教諭を務めるかたわら、八重山で初めての文芸同人誌「セブン」の創刊に加わり、詩や戯曲などの作品を発表した。戦後は「八重山文化」の創刊に参加、八重山の文芸復興に果たした役割は大きい。

牧志家資料展～宗得・つるゑの偉業～

石垣市立図書館では三月十六日から二八日まで、牧志家の近代資料、特に牧志宗得・つるゑ夫妻の記録を中心に展示をおこなう。牧志宗得は病院を経営するかたわら、戦後は石垣市長を務めた。つるゑは昭和初期にやえやま幼稚園を開園し、初代八重山婦人会長を務めるなど、幼児教育・女性の意識改革と啓発に功があった。

同図書館では二人の偉業を知ってもらうとともに、これからの八重山の未来を考える糧の一つにしてほしいと入場をよびかけている。入場は無料。

新刊紹介

波照間島近代の基礎資料
竹富町史編集委員会編
『竹富町史』第十巻資料編　近代５
―波照間島近代資料集―

八重山は古文書の宝庫と言われる。沖縄本島に比し、八重山では地上戦がなかったことが幸いし、文書が焼失を免れた為である。とはいえ、石垣島に比べると竹富町内の島々では極端に少ない。元々士族がいないため家分け文書が無く、村番所のような行政機関も、保存状態が悪く残されていないという事情がある。唯一の例外は竹富島の喜宝院蒐集館文書ぐらいである。

そうした中で、今回刊行された『竹富町史』第十巻の「波照間島近代資料集」は、極めて貴重な島の資料である。収録された資料は『島庁通達綴』（自明治三十五年～同三十七年）、『波照間島番所日記』（明治二十八年～二十九年）、『波照間小学校沿革誌』（明治二十七年～昭和二十年）の三点。

『島庁通達綴』と『波照間島番所日記』の二点はいずれも公民館に保管されていたものである。「編集後記」によると、長年村番所跡を公民館として使用していたことが幸いしたらしい。他の島では公民館を別の場所に造成した時に、番所の行政文書が消失しているケースが多いからだ。しかしこの二点の文書も、一九七一年の建て替えのとき琉球政府の公文書調査が入り、同文書を発見したのはいいが、複製後に原本が行方不明のままである。

「島庁通達綴」は、島庁から島々の村頭に当てて出された通達の綴りである。島庁は琉球王府以来の八重山の行政組織であった蔵元政庁が明治二十九年になって改編されて新たに設置された行政機関である。これにより明治政府→沖縄県庁→島庁→村事務所という中央から末端の行政機関に至る統治機構が確立された。島庁はおよそ十年間存続した。「通達綴」は、明治三十五年から三十七年までのものだが、この時期は明治政府が旧慣温存政策から皇民化政策へと舵を切り始めた時期である。土地整理により新たな税制をしき、徴兵制を実施した。時あたかも日露戦争の時で、通達にも島司から徴兵検査や戦意高揚に関する指示がなされている。こうした通達は、他の島々の村事務所にも同様のものが出されていたとみられる。それだけに当時の明治政府・沖縄県の統治策を見る上でも貴重である。

「波照間島番所日記」は、明治二十八年一月一日から二十九年十一月十四日迄のもので、日清戦争直後である。新暦の日付に毎日干支、天気、風向が記入され、納税のための運搬船の動向、漂着船の記録、雨乞いや世願いなどの年中行事、大和世になってからの国家行事なども記されている。

「波照間小学校沿革誌」は、同校所蔵の原本をデジタルカメラで複写したものをそのまま掲載している。言うまでもなく、学校沿革誌は島の貴重な公的な記録である。それは学校が島にとって大きな存在であるからだ。どの校長がいつからいつまで在職していたかは、ある意味で村頭と同じかそれ以上の意味を持つ。そして学校の記録といえども時代や社会を反映する。昭和十年四月二十日の記録には「忠君愛国ノ精神ヲ助長スベク本日ヨリ毎朝朝礼前ニ皇居遙拝ヲ行フ」とあり、軍国主義が教育現場に浸透してきた様子が分かる。同島の住民は軍の命令で西表南風見地区に強制疎開させられたが、識名信升校長が旅団本部に出かけて帰島を陳情したことやマラリアの様子が記されている。昭和二十年八月七日の記録には「帰島後部落民ハ食無ク看病人ナクテ死亡者続出シ数百人ヲ死亡セラル　児童モマラリヤノ為メ六十六名死亡セリ」と記している。何の修飾もなく事実を書いたものだが、記された数字の持つ意味は重い。

「通達綴」の皇民化教育の帰結を、これらの数字は物語っているからだ。

（竹富町役場、Ａ５判、４３４頁、非売品）

＊次回は 20 10 年 4 月 18 日です